

5-12 遠州灘沖の海底地形について

Submarine Topography off Enshu-Nada

海上保安庁水路部

Hydrographic Department, Maritime Safety Agency

水路部では昭和62～63年、ナローマルチビーム測深機（ハイドロチャート：浅海部，シービーム：深海部）を用いて，遠州灘沖の海底地形調査を行った。今回はこの成果について報告する。

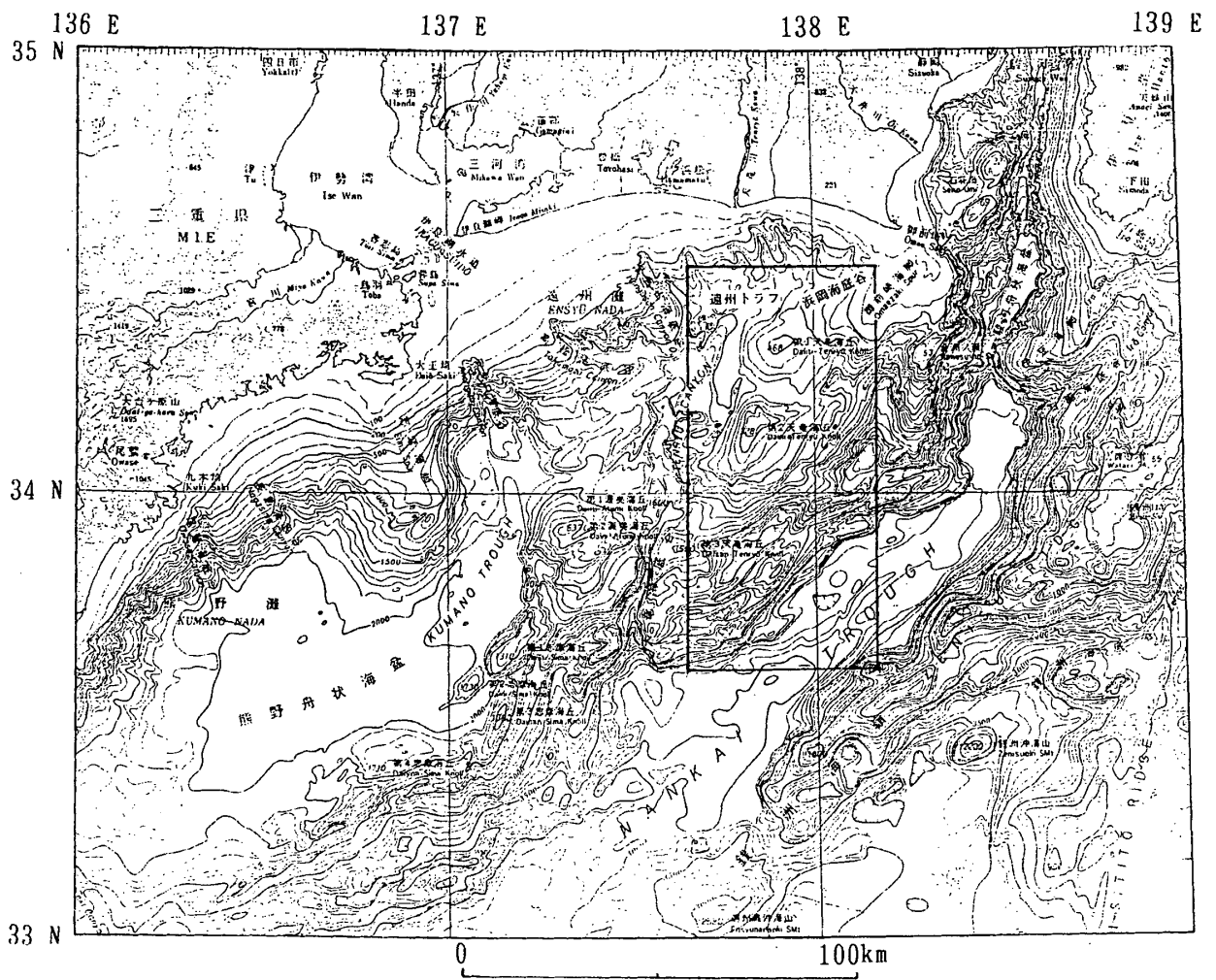
調査海域は御前崎の南西方，天竜川河口の沖合から南海トラフにかけての海域である（第1図）。水深1200m以浅はハイドロチャート（天洋），それ以深はシービーム（拓洋）により調査を行った。この海域は北東～南西に続く南海トラフと平行に地形が並んでいる。今回の調査によって明らかとなった海底地形の特徴は次のとおりである。

(1) 北部海域（第2図）

本海域において，陸棚からたくさんの支流が集まって天竜海底谷を形成している。今回の調査によって，陸棚に発する支流が，新たにいくつか明らかにされた。天竜海底谷の谷壁は直線的，かつ急傾斜であることから，構造的な成因が考えられる。海底谷の西側にN45°E走向の背斜軸があり，これに対し，本宮山海底谷は穿入蛇行している。一方，浜松海底谷は天竜海底谷の西壁の延長に位置しておりN40°Eの走向で背斜軸と斜交している。浜松海底谷は天竜海底谷と同様に構造的な成因をもち，その形成は背斜を形成する隆起活動よりも新しい事が推察される。第1天竜海丘の北斜面には，天竜海底谷の谷壁と平行な，N80°E走向の断層地形が認められる。第2天竜海丘の西に，深さ150m，幅1km，延長25km以上に及ぶ海底谷が新たに発見された（竜洋海底谷，仮称）。竜洋海底谷は直線的な流路を持ち，途中2カ所ではほぼ直角に曲っている。中央部の走向はN40°Eである。竜洋海底谷は下流部で天竜海底谷と合流するが，上流部には特に後背地を持たない。第1天竜海丘と，竜洋海底谷をはさんでその南西に，第1天竜海丘の裾野と思われる高まりが見られる。明らかに竜洋海底谷は，第1天竜海丘の先行谷である。

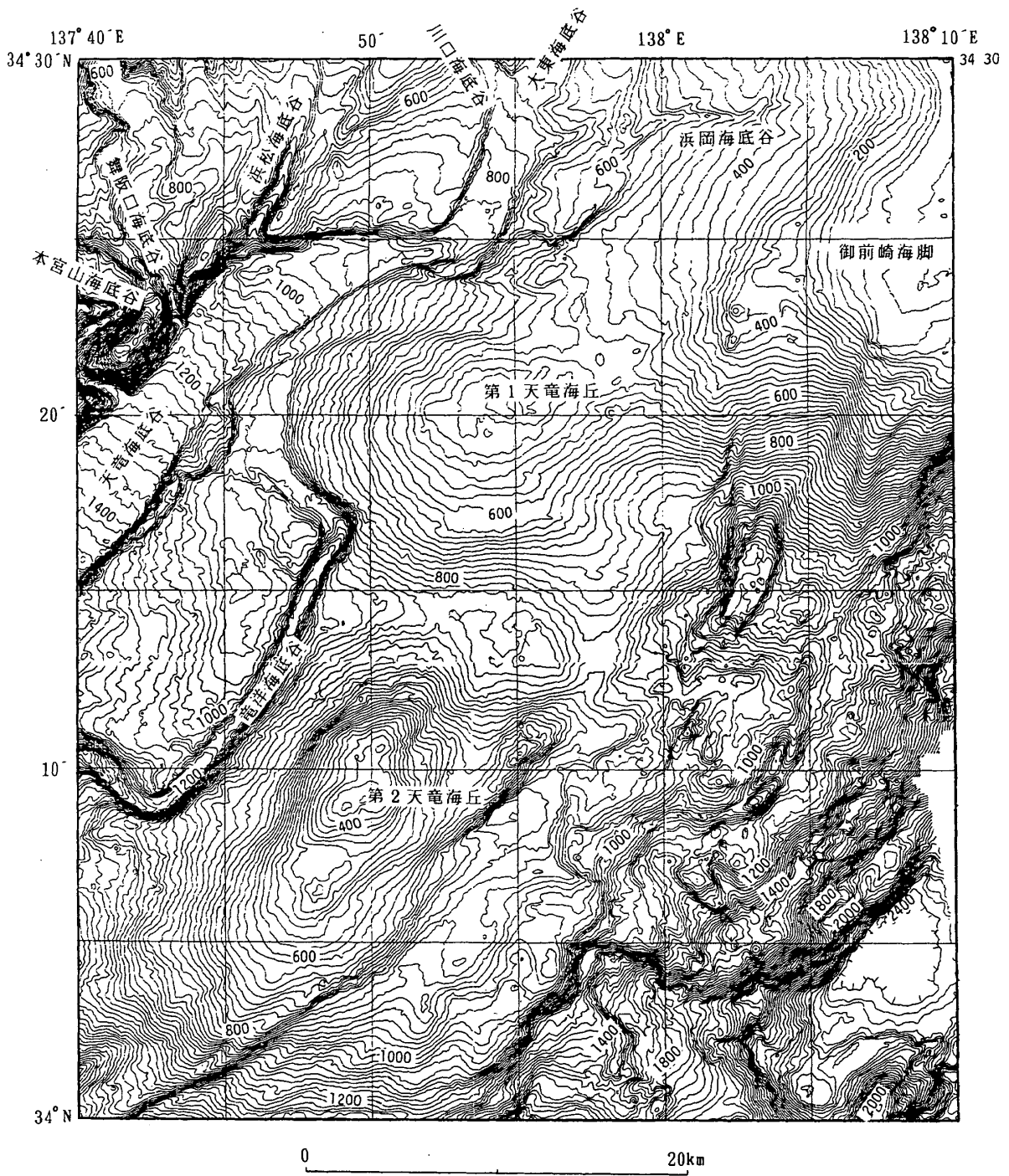
(2) 南部海域（第3図）

南海トラフの斜面は，トラフに平行な幅数kmのマイナーリッジとトラフが繰り返す複雑な地形となっており，単純な地形の第1，第2天竜海丘とは著しい対比を見せている。このエリアと第1，第2天竜海丘の間には幅5～8km程度の堆積盆がある。この堆積盆は，34°N，138°E付近にある，不規則な起伏を持つ鞍部で分けられている。大規模な崩壊によってこの堆積盆が二分されている可能性がある。また，この鞍部には地回り地形も認められる。南海トラフ底には，トラフ軸と平行な方向に長軸をもつ海膨状の高まりがいくつか見られる。この高まりは，トラフ中軸側斜面の傾斜が急で陸側が緩い非対称な断面を示す。これはフィリピン海プレートの沈み込みにもなる圧縮によって形成されたものと考えられる。



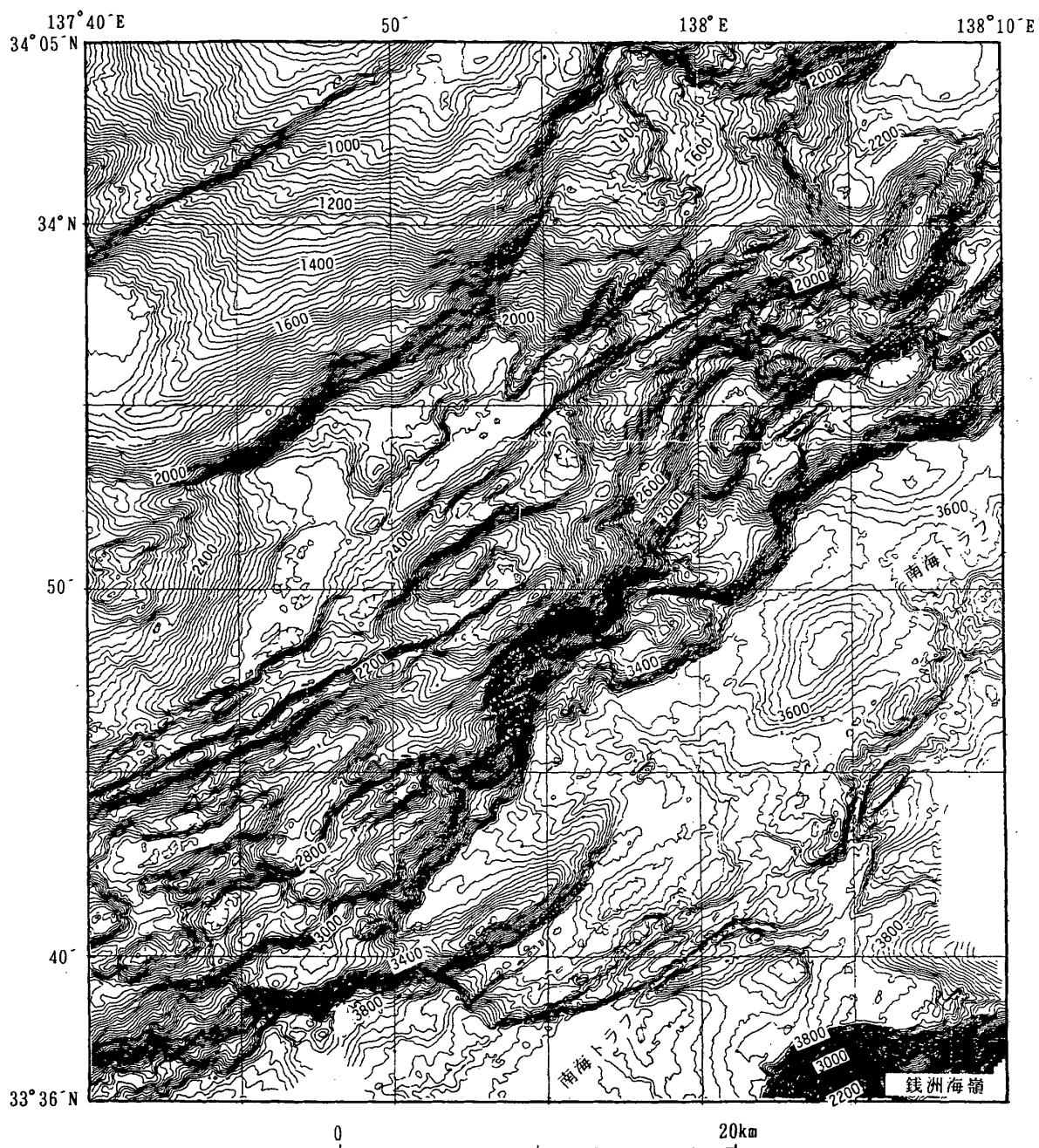
第1図 遠州灘付近の海底地形。四角い枠は調査海域を示す。

Fig. 1 Submarine topography of the Enshunada. A box shows the survey area.



第2図 遠州灘沖（御前崎沖）の海底地形（北部）。等深線間隔は20m。

Fig. 2 Submarine topographic chart off Omaezaki (northern part).
Contour interval is 20 m.



第3図 遠州灘沖（御前崎沖）の海底地形（南部）。等深線間隔は20m。

Fig. 3 Submarine topographic chart off Omazaki (southern part).
Contour interval is 20 m.